

私はこの3週間の教育実習において、多くの生徒や先生方と関わる中で様々な経験や学びと出会い、教師になりたいという思いが一層強くなった。

実習が始まる1週間前のオリエンテーションにて、指導教諭から教材を提示されると共に、学級通信の一部作ってくるよう命じられた。具体的には、「自分が初めて担任を持つクラスに配る一通目の学級通信だと思って作っておいで」との指示だった。高校時代の活動や今目指しているもの、趣味などの簡単なプロフィールを書いた学級通信を片手に、クラスの生徒達の前に立った心境は、何とも言えない高揚感と緊張感でごちゃ混ぜになっていた。高校3年生約30名のキラキラした眼差しがこちらを注目しているその光景は、恐らく他では味わう事のないものに違いない。とは言うものの、実習開始1週目は定期考査があり、生徒と言葉を交わす機会は極めて少なく、教材研究にほとんどの時間を費やした。2週目から始まる授業の準備や計画は確かに捗ったが、せつかくの教育実習であるにも関わらず、少し歯がゆい気分だった。

私が担当させていただいたのは、現代文の随想「鈴虫の間、ぼくの六畳間」という作品だった。アメリカ人である筆者が、日本独特の「間」、そして海外の「間」、極めつけは鈴虫にもその「間」が存在すると論じている作品である。短い作品ではあるが、独特の言い回しや表現が用いられており、どう生徒に理解させるかを考えながら、授業を計画していった。授業に関しては、指導教諭から特に指定はなく、「したいようにやって良いよ。研究授業で一番やりたい事ができるように持っていき。それでもし内容が余ったりしたら、実習後に俺がやっつくから。」と力強いお言葉までいただいた。そこで私は、普段は課されているという予習として次の単元を読んでくる宿題を無くし、パワーポイントを使ってそもそも「間」とは何だろうと考えさせる事にした。何の情報もない状態からイメージさせ、そのイメージと作品中で筆者が表現する「間」を対比させた。結果、そのやり方が生徒にとって分かりやすかったかどうかは懐疑的だが、2回目以降の授業で前時の振り返りを行った際に、沢山の声が上がった時は少し手応えを感じた。また、同じ授業を3クラスでさせていただく中で、クラスによって全く雰囲気異なる事に気付いた。ホームルームでも顔を合わせていたクラスは自発的な発言も多く、良い意味で明るく授業ができた。一方隣のクラスでは少しアウェー感を感じる（寝る生徒もいた）ような、静かな授業だった。また進学クラスにおいては、ほとんどの生徒が真面目に私に注目し、一生懸命に授業を受けてくれたため、他の2クラスよりもこちらが緊張したのを覚えている。どのクラスでも同じようにする、或いは各クラスの雰囲気や特徴を活かして臨機応変に授業を進めるのが、教師として求められるスキルであると痛感した。

研究授業までの指導案や準備で手一杯の私達実習生に対し、授業もしながら部活動にも参加し、他の業務までこなす先生方は本当に偉大だと感じた。大学の授業で、教師は多くの仕事があって忙しいことは学んでおり、それを重々承知しているつもりではいたが、実際の先生方の働きを見ていると改めて大変な職業だなと思った。しかしながら、そんな状況でも教師を退く事のない先生方の原動力が、この教育実習を通して垣間見えた気がする。多忙化、ブラックだと言われていても、教師にしかない魅力は学校内に溢れていた。純粋に「先生」と呼ばれる嬉しさ、真剣な生徒達の眼差し、他の先生方との協力、

そして生徒との何気ない日常が本当に幸せだった。たった3週間の実習では、恐らく教師の本当に過酷な部分は体験していないだろうし、むしろ良い部分しか経験できていないかもしれない。そうだとすると、次は本当の「先生」として教壇に立ち、未来ある子供達と共にこの先も学んでいきたいと思った。そして、そう思わせてくれる生徒、先生に巡り合えた実習だった。